

全科協ニュース

1977年9月1日発行
(通巻第37号)

全国科学博物館協議会

東京都台東区上野公園
国立科学博物館内

☎ 110

Tel. 03-822-0111(大代)

おもな内容：◇科学博物館と夏休み期間中の小・中学生の学習活動について ◇全科協北から南から 博物館職員講習を受講して 交通科学館 木村宏

科学博物館と、夏休み期間中の小・中学生の学習活動について

毎年、夏休みの時期になると、われわれ科学博物館関係者が顔を合わせるたびに話題になるのが、夏休み中の小・中学生の学習活動に関する対策である。それらを大きくわけてみると、その一つは、小・中学生対象の事業の種類、企画、実施方法であり、もう一つは、宿題や自由研究の解決を科学博物館に求めてくることへの対応である。特に後者の場合、動植物の名まえを聞きに来るのはまだよいとして、電話で、自由研究で何をしたらよいか聞いてくることなどのように、答える前に啞然としてしまうようなケースがしばしばあって、とかく問題が多い。

ところで、このようなことに関する博物館側の対応のしかたは、積極的に事業を企画し、実施する所もあればそれは学校教育の守備範囲であるとして、第一義的には考えない館園もあるようであって、必ずしも一致した見解とはなっていないようである。その原因は、博物館に課せられた事業目的、あるいは地域社会への結びつき方の姿勢が、それぞれの館園によって相違することや、職員の事情などによるからであろう。さらに、過去においてもたびたび問題となってきた博物館と学校教育との関係という基本的な論議にも触れてきて、明解な一線をもって画することは難しくなってくる。

もちろん、このようなことに対して、科学博物館側が統一した見解を持たなければいけないという理由も今のところ見当たらない。しかし、成り行きにまかせておくのではなく、問題点としてクローズアップし、今後のために考え方の拠り所を広しておく必要があるように思われる。以上のようなことが、編集委員会で話題となり、手はじめに、下記の事項について各館園の実状を聞いてみることにした。

- (1) 今年の夏休み中のこどもたちを対象に実施した事業、集会活動。

(2) 小・中学校の宿題・自由研究に対して、博物館が協力すべきかどうかに関する貴館の意見。

(3) 貴館の小・中学校の宿題・自由研究に対する対処のしかた。

その結果、15館から御報告をいただいた。今回はお寄せいただいたものをそのまま掲載し、末尾に編集側で特に気づいた点を拾ってみることにした。すでに触れたように、問題の絞り方によっていろいろな意見が出てくると思うが、御意見は本ニュースのためにぜひ御投稿いただきたい。そして必要によってはもっと掘り下げてみたいとも思う。終わりに、御多忙のところ、御報告いただいた館園に対し厚くお礼を申し上げます。

1. 今年の夏休み中のこどもたちを対象に実施した事業・集会活動

室蘭市青少年科学館

夏休みを利用して、自然を知り、自然に親しむ野外活動を通して、科学する心の芽をはぐくみ、資料の収集、保管の知識の習得と余暇の利用の一つの正しいあり方を認識させる目的により、夏休み科学クラブを下記のとおり開設いたしました。

模 型 A クラ ブ	プラモデル作りと色ぬり	(2日)
昆 虫 クラ ブ	昆虫の野外採集と標本作り	(2日)
標 本 クラ ブ	プラスチック封入標本作り	(2日)
海 藻 クラ ブ	海藻採集と標本作り	(1日)
植 物 クラ ブ	植物の野外採集と標本作り	(2日)
模 型 B クラ ブ	模型飛行機作りと飛ばし方	(2日)
天 文 クラ ブ	夏の星の観察	(2日)

室藤報恩会自然史博物館

夏休み自由研究の相談 自由研究の質的向上をはかる

ため、研究のまとめ方について話し合った。8月22日・23日。

山形県立博物館

今年の夏休み中に、小・中学生を主な対象として本館が行った行事に「夏休み学習展」と「自然と郷土学習教室」がある。

1. 「夏休み学習展」は開館以来の催し物で、小・中学生の自由研究の向上をはかることを主な目的として、特別展示をし、相談日を設定しているものである。

まず、動物・民俗等理科・社会科の6分野からそれぞれ具体的なテーマを設定して、特別展示室に収蔵品を活用した展示を行い、研究の進め方、まとめ方の具体例を示す。本年のテーマは次の通り。

- ① 岩石や鉱物を調べてみよう。
- ② 花と昆虫の関係を調べてみよう。
- ③ 外国からきた植物について調べてみよう。
- ④ 町や村の石碑や寺・神社を調べてみよう。
- ⑤ 町や村で出土した土器や石器について調べてみよう。
- ⑥ 物をはかる道具について調べてみよう。

さらに、期間中に2回の自由研究相談日を設け、学習展会場に特設した相談コーナーで全学芸員が親子連れやグループの小・中学生の質問や相談に応ずる。夏休みに入って間もなく第1回目には研究の進め方について、終わりに近づいた第2回目には採集した資料の鑑定や研究のまとめ方について相談に応じ、あわせて、映写会も催す。

この学習展の観覧者や相談日の来館者は、地域的にも年令的にも広範囲にわたり、また相談日以外の相談のための来館者も多く、県民から好評を得ている。

自由研究を機会に身近な事象に目を向けさせ、郷土の自然や歴史に関心をもたせようとするもので、博物館のめざす実物教育の場としてこの「夏休み学習展」は大きな意義があるものと考えている。

2. 「自然と郷土学習教室」は、社会に開かれた博物館として人びとの学習に積極的に貢献するために本年から開設したもので、市町村教育委員会の協力を得て各地で実施している自然と歴史の屋外学習教室である。講師には本館学芸員があたり、さらに地元の研究家も委嘱している。

県内5会場の計画のうち、夏休みに実施したのは2会場で、母親をはじめ大人の参加者もあったが、小・中学生が主体で、親子連れで自由研究の場に応用した参加者もみられた。
(金山耕三)

川口市立児童文化センター

1. 教室活動……絵画教室、天文教室、ハーモニカ教室
初心者ハーモニカ教室、手芸教室、書道教室、工作教室、模型教室、七宝焼教室、電気教室、ラジオ工作教室、紙工作教室、カメラ教室
2. 映画会……土曜映画会、日曜映画会、交通安全映画会、母と子の映画会
3. その他……プラネタリウム一般公開、太陽観察会、夜間天体観察会、自然観察キャンプ、工場見学会、巣箱づくりの会、川口市小学生写生大会

天文博物館五島プラネタリウム

1. 星の会天体観望会 星の会会員のうち、中学クラス、一般クラスを対象に千葉県鹿野山へ2泊3日で天体観望会を実施した。(中学生が約80%)
2. 望遠鏡取扱説明会 入館者全部を対象にした行事であったが、約2分の1以上は小・中学生であった。
3. 夏休みこども天文教室 小学校3年以下が対象であるが、保護者と一緒に勉強できる。

通 信 博 物 館

1. 夏休みこども大会の開催

本大会は、都内、近県在住の小・中学生を対象に、昭和48年以来実施のもので、目的は絵画、工作の基礎指導を主体とした図工教室と、学習の要素を含めた講話、そして楽しいアトラクションをとおして、家族とのつながりを一層深め、併せて社会教育機関としての博物館をより理解してもらうためのものである。

本年は、8月16日(火)～8月28日(日)月曜日を除く12日間、次の内容で実施した。

① 図工教室

絵画、折り紙、紙工作、モビール、紙ねん土の5教室とし、いずれも定員は60名で、指導は女子美術大学の博物館学実習生34名を1教室6～10名に分かちあたせた。

授業時間は10時～11時30分までとし、受講受付は毎日開館と同時にだったが、大体各教室とも30分後には定員に達する状況であった。

② 講 話

専門講師を招き社会科に役立つ講話を10時～11時の1時間程度実施した。200名収容の同会場は父兄を交えて各日満員盛況であった。

③ 相談コーナー

郵便、電信電話、放送、図工等に関して、会期中学習の相談に応じた。

④ アトラクション(省略)

電 気 通 信 科 学 館

電気通信科学館の夏休み企画

小・中・高生の夏休みは、博物館にとってかき入れどき、様々な趣向をこらした行事が行われるのが通例である。当科学館でも、夏休みに照準を合わせ、特別展を開催することとしている。昨年は「うずまきの科学」と銘打って電気通信でも重要な働きをしている「うずまき」＝「コイル」を中心として、その他広く自然現象、生命現象、社会現象にも及んで、その不思議な性質を問いかけてみた。

今年は、「時間の科学」をテーマとして、通信の世界における時間の使われ方を解説し、広く我々の生活に関連している時間について考えてみた。「時間とは何か」テーマが大きすぎ、また、抽象的であるため満足な出来ばえではなかったが、自然科学の中における時間について、工学、理学、生物学、天文学、医学の面からのアプローチを試みたつもりである。7月20日から9月11日までの展示で8月末現在、入館者は140,000名に及んでいる。

入館者層は、夏休み中のこともあって小学生が多いが当科学館の性格から高校生、大学生、若手サラリーマン層も多数訪れ、中でもパパやママに連れられて説明に耳を傾ける小学生、科学には強いとフィアンセに得意のポーズを見せる青年カップルなどの姿が印象に残る。アインシュタインの時間、相対性原理による宇宙時間のことなど専門的な質問になると、説明に当たるコンパニオンもお手上げの状態もあったが、こうした現象は科学館のあり方としてインストラクティブであり、好ましいことであろうと考えている。

当科学館では、来館者のこのような創造的な学習意欲をもちたてるため、常設展示と併行して、創造コーナーのようなものを設け、学校教育、理科系のクラブ活動などと連動して、より魅力的な運営体制を整えたいと目下鋭意検討中である。 (豊 義秀)

神奈川県立青少年センター

アマチュア無線のつどい (ハムの資格をとりましょう、フィールドデー・キャンプ、モールス信号を覚えよう、8日間)

えいがとおながくの会 (2日間)

夏の子供劇場 (No. 103 青少年劇場、ふりむくなペドロ、2日間)

夏休み創作教室 (ガラスに絵を彫る、私の顔のスタンプ、木綿のスカーフをそめる、花の写生、8日間)

エレクトロニクスなんでもコーナー (ラジオの原理とつくり方、基板からつくる受信機O-T-1、3日間)

こどもリーダー講習会 (伝承あそび、夏のあそびと手作り工作、4日間)

科学教室 (インキとインキ消し、葉脈標本の製作、シャボン玉を作ろう、時計、岩石のみがき方、ゾウリムシの走性、簡単な望遠鏡の製作、花粉の永久プレパラート製作、ガラス細工、文鎮作り、11日間)

楽しい子どものつどい (ヨット工作、ペープサートで遊ぶ等4テーマ、4日間)

電子顕微鏡一般公開 (ケイソウほか、3日間)

夏休みリクエストアワー (7. 21~8. 21)

科学映画の会 (2日間)

ラジオ・テレビ講座 (電子式ビヨビヨチャイムの製作、トランジスタ発光警報器の製作、4日間)

夢のヤングDJアワー (フレッシュなアイディアで手作りのコンサートを、1日)

フルートをおぼえよう (5日間)

ギターをおぼえよう (5日間)

サンデー映画会 (1日)

夏期工作教室 (木工道具の使い方とフラワーボックス等の製作、2日間)

工作相談と自由製作 (2日間)

ガラス細工講習会 (1日)

七宝焼の手ほどき (3日間)

夏休みレコードコンサート (音楽・お話・映画、3日間)

展示教室 (ミシンのしくみとはたらき)

福井市立郷土自然科学博物館

7月28・29日 海産動物学習会

参加者37名 (磯の小動物を観察する会で、毎年7月下旬に実施している)

8月28・29・30日 採集品の名前を聞く会

参加者722名 (採集品の同定会で、植物、昆虫、岩石、化石、貝が対象。ただし植物のうち海藻、蘚苔類は除く)

岐 阜 県 博 物 館

(1) 郷土の化石展

県内化石産地より出た有名化石を中心に、館蔵資料を含めて、産地別 (時代別) に展示し、また平素みる機会の少ない微化石などは、顕微鏡や投影器等を使って、自分の目で確かめができるように、2つの展示場を設けて「夏の特別展」として、小中学生を主対象に公開した。

なお、化石に関係する図書コーナー、ナウマン象の実物大パネル、相談コーナーもあわせ設置して学習の便に供した。

入場人員 8,361 人のうち、
小・中学生 3,538 人（比は約42.3%）。

(2) 映画会

平日は午後 1 回、日曜日は午前・午後各 1 回定時上映。内容は、自然・人文に関する映画、県内紹介を中心にフィルム 2～3 巻を組み合わせで講堂（定員 200 人）において上映した。

（鑑賞人員）

児童	生徒	青年	成人		老人	計
			成男	人女		
486	773	421	542	332	147	2,701

(3) その他

特別展会場のほか、本館には郷土学習室、図書資料室があり、ここにはそれぞれ相談コーナーがある。特に日を定めて行わないが、随時実施している。特に郷土学習室には、実物標本をはじめ複製品、児童・生徒向き図書約 700 冊が常備されているので、夏休み後半には、植物や昆虫、化石、土器などに関する相談もしばしばみられ、グループによる学習も見受けられた。（鷲見峯男）

大阪市立自然史博物館

動物園サマースクール

動物園と共催。小学校 4・5・6 年生。3 回に分けて計 210 名。各 3 日間。

なお、他に小・中学生を含めた一般向けの行事もあるが、その中の標本同定会は、参加者181名中、131名までが小・中学生であった。

生駒山宇宙科学館

1. 小・中学生のための夏休み天文講座

- | | |
|-------------------|-------|
| (1) 月の動きと月を見る会 | 7. 25 |
| (2) 星の動きと星座を知る会 | 8. 3 |
| (3) 流れ星を見る会 | 8. 12 |
| (4) 流れ星を見る会 | 8. 15 |
| (5) 夏休み天文講座総まとめの会 | 8. 22 |

2. 小・中学生のための夏休み天文なんでも相談コーナーの開設

鳥取県立博物館

(1) 親子の博物館野外教室

7月31日 米子市城山附近

参加者 約60名（内小学生35名）

(2) 博物館中学生講座

8月1日・2日 日野郡江府町周辺 参加者92名

(3) 星座観望会

8月5日 博物館前庭

参加者 約150名（内小・中学生80名）

(4) 化石採集と地質見学会

8月7日 島根県八束郡玉湯町布志名

参加者 38名（内小・中学生15名）

(5) 標本の名前を調べる会

8月24日 博物館会議室

参加者 150名（内小・中学生78名）

香川県自然科学館

夏休み中における当館の業務は、調査研究が主体となっているため、当館が直接主催しての事業は行っていない。

しかし、当館以外の施設や機関が実施した事業に対し、当館の施設および職員が積極的に協力した。

(1) 小学校集団宿泊学習における指導

- ・学校数 12校
- ・児童数 1,313名
- ・当館内の展示について職員が指導

(2) 地区子供会における指導

- ・団体数 8
- ・児童数 516名
- ・当館内の展示について職員が指導

(3) 自然および文化財に親しむ運動団体に対しての指導

- ・団体数 4
- ・児童数 234名
- ・野外において、当館職員が出向き、自然人文についての指導

愛媛県立博物館

日本列島の貝展（特別展）

海岸生物展（特設小展示）

愛媛の甲虫展（特設小展示）

天文教室 七夕の星

天文教室 秋の星座

2. 小・中学校の宿題、自由研究に対して、博物館が協力すべきかどうかに関する意見

斎藤報恩会自然史博物館

当博物館に關係する事例についてみると、採集した化石や植物の名前がわからないという相談が多い。そして、それぞれの標本について正しい名前や産地などをきちんとつけておくことの大事さや、その標本の位置づけがはっきりしてくると、また翌年も発展させたかたちで

研究を継続しようという気になる子供が多い。従って、単に宿題・自由研究をきちんとまとめるということではなく、子供たちが自然を更に深く広く見られるようになるための援助・協力をしていることになり、大いに意義があると考えられる。

川口市立児童文化センター

館の設置目的等にてらしてみても、児童生徒の宿題や自由研究に対しては直接・間接的に協力すべきであると考えている。

天文博物館五島プラネタリウム

積極的に協力するためには、いろいろ問題点があり、現状ではそこまでやっていない。しかし全々協力しなくてよいとは思わない。可能な範囲で協力する。

神奈川県立青少年センター

学・社連携教育の見地から協力することが望ましい。即ち、社会教育施設としての博物館、博物館相当施設としては、生涯学習の場としての機能ももち合わせているし、在学青少年の社会教育の場としては、しかるべく配慮されなければならない。

福井市立郷土自然科学博物館

宿題・自由研究に対して博物館はできるかぎり協力すべきだと思うが、研究のテーマは各自の発想にまかせるべきだと考えている（標本作製の手順など技術的なことについては正しい方法を指導している）。

学校が宿題として課した標本の同定・評価は、本来その宿題を出した先生が指導すべきではないだろうか。

国立科学博物館ニュース Ⅻ 99（昭和52年6月20日発行）に書かれた金井弘夫氏の意見に同感。

岐阜県博物館

親しみ易い博物館としても、また郷土資料を中心にした郷土の総合博物館としては、学校教育に協力するのは当然の義務だと考えています。手不足の人員ですが、自然科学や人文科学、郷土の理解への導入や、手助けを、今後積極的に行いたい。

大阪市立自然史博物館

原則として宿題の解答役を勤めるべきではないと考える。博物館は一般市民に対して、展示及び日常的な普及活動を通じて、年齢や階層にとらわれず、自然と人間について（自然史系の場合）考えるための動機づけの場であり、発達段階に応じたカリキュラムのもとに進められ

る学校教育とは異なるものである。博物館と学校とが協力しあって教育をすすめる態勢がまだできていない段階では、博物館が協力できる内容は、本来学校の先生が指導すべき内容である場合が大部分である。したがって質問の内容にもよるが、発展的でなくただ答を教えるだけのものや、具体的でないもの（何をすればいいでしょう、どうすればいいでしょう）には協力できないと思う。

ただし博物館の展示を見ながら質問のプリントに答えるという形式の宿題が当館の場合数件あり、それについては先生と連絡をとりながら協力している。

当館としては、現在多く見られる自由研究という形での宿題の出しっぱなしを改めること、また学校教育による有効な博物館利用を進めることの2点について、全科協から関係方面へ働きかけをされるよう希望する。

生駒山宇宙科学館

十分協力すべきであると思う。同時に、博物館の見方利用の仕方も教育できる絶好のチャンスである。

ただし情報過多時代で、電話の普及がめざましく、人の動きも全国的になっていきる現在、遠方からの電話による問合せが問題である。こんな場合、当館ではその近くの館園を紹介している。

鳥取県立博物館

夏休みは学校で学習する事柄を実地で確かめ、自分のものとするに絶好の機会である。

博物館は、これらの自発的学習を学校教育と一体化して援助・指導すべきである。

香川県自然科学館

小・中学校の児童生徒が行う自由研究については、積極的に援助をしたい。その指導は、助言、資料の提供の範囲内に留めるくらいが、教育的配慮だと考える。またこれらの目的をもっての来館者に対しては、研究のきっかけがつかめるような、整理発展ができるような展示や関連した施設の充実をはかる必要がある。

愛媛県立博物館

7～8月には、とくに小・中学生の自由研究の参考になるような展示、例えば「日本列島の貝展」では、日本における貝塚の分布とその出土品、日本列島の人々が現在各地で食用として利用しているもの、また瀬戸内と土佐沖を対比した貝の分布などいくつかのテーマに分けた展示をしている。

植物や昆虫でも個体変異、垂直、水平分布、生活を理解させるためのパネルなども多数用意している。

3. 小・中学校の宿題・自由研究に対する 対処のしかた

室蘭市青少年科学館

当館職員の可能な範囲内で、依頼がありましたら、個々に対応しております。

斎藤報恩会自然史博物館

本年は、何をどうやらうかという、事前の相談会は行わず、それぞれの考えでなされた採集標本について、一定の期日をもうけて、一つ一つについて検討し相談にのる方法をとったが、なかなか決めたルール通りにはいかず、かけこみ相談も多かった。それらも含め、持ちこまれた資料については、子供たちの期待にこたえるため最大限の努力をしたし、今後もそのつもりでいる。

川口市立児童文化センター

夏休み期間における特別行事の企画・立案にあたっても、宿題や自由研究と関連づけたものを盛りこみ、実施に移している。また自由研究等の相談にも随時応えるようにしている。

天文博物館五島プラネタリウム

数年前には質問コーナーを特設して、いろいろ相談にのったり、質問に答えていたが、利用者が意外に少なく、ここ2、3年、特にコーナーは設けていない。

ただし質問や相談をもって来る人には相談にのっている。又解説が終わった時に質問にくる人も多い。

また売店で参考図書の相談などにも応じているが、自由研究の中には、その学年より高度な内容を取りあげている傾向がある。

展示としては夏休み中、工作的なものとして日時計と星時計の作り方をパネルで掲示。又日の出、日の入り時刻表や、月の観察に便利な図表などの掲示もしている。

通信博物館

平常は、要員のなかなか困難であるが、極力来意に添うよう努めている。例えば調査研究にかなった参考図書の選定、あるいは、複写機を備えてこれらのコピーに便宜を図るとか、また、理解し難い部分については解説を加える等対処している。

神奈川県立青少年センター

- ・各種催しもの、講座、教室等を開催し、学習の場を開放提供している。
- ・情報・資料の提供をしている。
- ・各種相談に応じている。

福井市立郷土自然科学博物館

各種の問い合わせに対しては可能なかぎり答え、また適当な指導書の紹介を行っている。

標本の同定については月末に同定会を実施している。

岐阜県博物館

児童・生徒の自然科学・人文科学に対する芽生えを助言育成するための指導を通して、学校教育に寄与することができると考えています。従って、宿題や自由研究に対しても、その延長と考え、基本的には前項と変わりありません。

大阪市立自然史博物館

館に直接来られたり、電話があった場合、前記のような協力すべきでない内容については、本の紹介や、学校の先生に具体的に質問するよう指導し、質問に答える場合も、本や実物を使って筋道を説明し、答だけを話すことはしない。件数の多い同定については、同定会の日を決め、その日に来てもらう。ただし、本来の意味での自由研究についての具体的な質問については、可能なかぎり相談に応じている。

生駒山宇宙科学館

こんなところで、こういうふうに見なさい、調べなさいと指導する。

鳥取県立博物館

小・中学生とも野外観察、実地指導を主としており、宿題、自由研究の対処は学年、程度、目的に応じた助言、参考文献の閲覧等として学校側の狙いの自主的活動を阻害しない範囲の指導に止める。

小学生の指導、参加は父兄同伴とし、親と子の同時学習と危害予防を考える。

中学生に対しては一般人同様に扱い、質問事項、照会事項等、程度、要望に応じた助言指導を行う。

中学生講座は、郷土の自然・歴史・文化の認識をたかめることを目的として開催する。地域中学校の協力を得て参加者を定め、その地域を教材として、必修内容は全員が受講し、希望によって自然系と人文・文化系に分けて実地踏査、採集、見学、観察等を行って指導する。

香川県自然科学館

当館を訪れる自由研究希望者に対し、施設備品の提供、館員による指導は積極的に行っている。

また、電話による質問が多く、当館としては積極的に応答をしている。

愛媛県立博物館

7～8年前までは、夏休みの終わりにになると3,000～4,000人もの児童・生徒が博物館へつめかけて混雑を招いたが、現在、小・中学校では分類学的な宿題をださなくなったので、鑑定会など実施しなくてもよくなった。自由研究に対しては、館員の指導、その他愛媛県児童生徒理科入賞作品集や、その他の文献を参考に供している。

以上の報告から気のついた点をいくつか紹介すると、

1. 「夏休みのこどもたちを対象に実施した事業・集会活動」として、特別展、集会活動、相談コーナーがある。

特別展を特に夏休み期間ということ念頭に企画した博物館は多く、報告のあった館のほかにも、神奈川県立博物館「化石—ジュラ紀の生物」、国立科学博物館「ピテカントロプス展」、明石市立天文科学館「美しき星座絵図」、交通博物館「津軽海峡の70年—青函連絡船70年資料展」などがあった（人文系の特別展は除く）。これらの特別展には、博物館に入館者を誘致する目的とともに自由研究等の参考に供する意図のものがあり、特に山形県立博物館で開館以来毎年開催されている「夏休み学習展」はその好例である。また、愛媛県立博物館のように特別の展示コーナーを設ける館もあった。

この期間は各館とも遠方からの入館者が多く、その意味でも特別展のテーマ設定は重要な問題であろう。

集会活動についても、多様な内容が報告されているうち、小・中学校の宿題対策と見受けられるものが相当数ある。地域によって宿題の出し方も変わってようが、動植物等の採集会は少なくなっているようである。

採集品の名前を調べる会のように、その結果が直接宿題の結果に結びつくものは自然史系の多くの博物館で行われているが、単なる同定会から調べるという自主性を加味した名称が集会活動に付されているところも多い。報告でははっきりしないけれども、実施の方法は従来から少しずつ変わってきているようである。実験や工作の指導の中にも宿題を前提としたもの、ヒントを与えるようなものがあるが、年間を通しての通常の活動も含まれているので、はっきりした傾向はつかみにくい。全体的に夏の期間はこどもたちのための集会活動の数は増えている。特に神奈川県立青少年センターでは、学校単位の

見学がないためか、集会活動に的をしばっているようである。

相談コーナーもいくつかの館で用意されていたが、特定の日を定めて行ったり、応援を頼んだり人員の少ない館では大変なようである。相談という事業が、博物館としての機能なり組織に組み込まれているところもあり、2の考え方や3の対処のしかたと合わせて問題点の一つであろう。

2. 「小・中学校の宿題・自由研究に対して、博物館が協力すべきかどうか」については、協力すべきであるという回答がほとんどであった。しかし、どの程度協力するかということになると意見はさまざまで、「研究テーマは各自の発想にまかせるべき（福井市立郷土博物館）」、「助言・資料の提供の範囲内に留めるくらいが教育的配慮であろう（香川県自然科学館）」となると、対処のしかたもむずかしくなってくる。

一方、「原則として宿題の解答役を勤めるべきではない（大阪市自然史博物館）」という考え方も、ただ答を教えるだけのものや具体的でないものに限っての原則である。「全然協力しなくてよいとは思わない（五島プラネタリウム）」という消極的な協力の意見もあったが、各館の学芸員の本音かもしれない。

3. 「小・中学校の宿題・自由研究に対する対処のしかた」については、大きく次の5つにあげられる。

- ① 参考となるような展示を用意する。
- ② 参考となるような集会活動を企画する。
- ③ 学習室・図書室・工作室・実験室を利用させる。
- ④ 相談に応じて指導・助言する。
- ⑤ 相談に応じて参考図書を紹介する。

博物館として、博物館ならではの対処を考えると、まず展示、そして博物館資料があげられよう。特別展のみならず、各館のいろいろな通常展示は科学に対する興味を喚起し、科学知識の普及に役立つように、金と人手をかけているものである。展示を見学することは、さまざまなテーマ発見へ結びつき、視点を少し変えれば、新しいバリエーションも生じるであろう。

相談指導については、可能な限り、極力、積極的になど、いろいろな表現があろうが、相談にのっているようである。どの程度ということになれば「自主的活動を阻害しない範囲（鳥取県立博物館）」ということになろう。また相談を受ける人（学芸員）や相談の内容についてもその博物館の規模や目的、内容と合わせて、ある程度の目安ができていられると思われる。報告にもあるよう手軽な電話による相談は最近増えてきているようで、この処理のしかたにもこれこそという対応策は見つかっていないようである。

 全 科 協 北 か ら 南 か ら

博物館職員講習を受講して

交通科学館 木村 宏

第4回を迎えるというこの講習に、私の館では最初の受講者として参加する機会を得た。国家試験の難しさを感じていたので、これは千歳一遇の好機であった。

受講者は、年令・地域・館種・職種など、実に様々な構成であり、寝食を共にするうち日本の博物館全てを垣間見る思いであった。森羅万象ごとく話題にあがらぬものは無く、多彩な専門家集団であった。一日の講義が終わり、寮での雑談は、それぞれのお国訛が飛び出し次々と話題の途切れぬ間もないほど楽しい日々であった。

顕学の講師陣から手際よく集約された講義は、最初の問題とその方向が示され、私にとっては新鮮さと驚きの連続であった。日常に立ち帰り、自らの専門を深め、いかに学際的な立場で普及し得るか、それはひとえに学芸員の資質いかんにかかわるかが痛感されたのであった。博物館運営についても、学芸員の役割が今さらながらに重大であることが思い知らされたのであった。

思うに、大学で養成された学芸員の資質がしばしば問題にされる。また調査によると、日本の博物館総数1,300を数え、博物館法の対象になる館はそのうち400といわれ、学芸員数は1館当たり1.5人と報告されている。毎年大学から巣立つ学芸員有資格者は1,500人といわれる

が、この人たちの全てではないにしても、希望通り博物館に入れる人は一体何人いるのであろうか、疑問を持たざるを得ない。時代の要請に応え、博物館の振興を急務とするなら学芸員の充足と資質向上は不可欠であるといわれるが、この度の受講者数にしても40人余りとは、問題がかなり広範で根深いといわざるを得ない。受講者には、学校から来られた先生方が多くおられ、その待遇の低下を実際に耳にし驚くほかなかった。これではライフワークとして学芸職を極めることもならず、ましてや博物館の振興にもかかわることも不可能であろう。

博物館が広く大衆に開かれるには、普及教育を担当とする学芸員を始めとしてその充足が必要であり、この点公私立にかかわらず採用に多くの問題がある。また、再教育の必要が言われながらもそのシステムも日博協や全科協の研修を除くと皆無に近い。この度の講習に参加し資格取得もさることながら、博物館行政にかかわる貧困に改めて目を開く思いであった。国立社会教育研修所のこの度の講習にとどまらず、更に拡充した学芸職の研修システムを行政レベルで実施できないものであろうか。40日の講習を終え、机を並べた仲間たちと語り得たのは日本の博物館の未成熟さを表わす数々の問題点であった。

おねがい

ルーマニアの Grigore Antipa 博物館から、次のような依頼状が届きました。

——1977年3月4日の地震のため、私たちの博物館の建物は大きな打撃を受け、外国産のヘビ標本、1,200種以上の魚類、海洋生物の標本びんが破壊されました。全力をあげて復旧に努めておりますが、破壊された代わりになるようなもの、重複している標本がありましたら、寄贈していただくことで御援助願えれば幸いです。どのような標本でも結構ですが、日本の哺乳類、鳥類、爬虫類、無脊椎動物、あるいは日本の水域にすむ魚類、その他の海洋生物でしたら好都合です。——

この Gr. Antipa 博物館はルーマニアの自然史博物館で、創立から140年以上たっている伝統のある博物館です。全科協の会員館で、「日本の哺乳類、鳥類、爬虫類、無脊椎動物、魚類、その他の海洋生物」の標本で寄

贈できる余裕があれば御協力ください。

くわしくは全科協事務局へ御照会ください。

あとがき

全科協ニュース（通巻第37号）をお届けいたします。

このところずっと発行の遅れが続いておりますことをお詫びいたします。次の2号分の編集委員会が済んでおりますので、明年は平常のペースに近づくことができると思います。

今後とも積極的な投稿および情報の提供について御協力くださるようお願いします。

たとえば新しい企画を実施したり、展示を更新したりまた、館園長の変更等があった場合には、ぜひ事務局まで御一報ください。

本号では、会員館園の夏の事業がいろいろ報告されておりますが、これらに関する御意見もお願いします。